

〈現人神〉と大衆天皇制との距離

——三島由紀夫「英霊の声」を中心に——

洪 潤 杓

第一節 はじめに

一九六六年六月に『文芸』に発表された、三島由紀夫の「英霊の声」は、発表直後から大きな反響を呼んだテキストである。その理由として、オカルト的内容に加え、当時目まぐるしい経済成長を謳歌していた現代日本への痛烈な批判とともに、戦後、旧時代の遺物とされた「天皇の神格化」をあまりにも激しい口調で語ったことなどが挙げられるだろう。

江藤淳が『英霊の声』から感じられるのは露出された観念である¹⁾と指摘したように、「英霊の声」は、三島の考えが直に露出されているような印象を与える。三島自身も、この作品について、林房雄との対談で「とりつかれたようになって書いた²⁾と述べている。池田純滢は、「芸術至上主義者と目された三島の作品を、〈思想〉に於いて論じること自体無意味な研究方法であった。少なくとも『英霊の声』が書かれるまではそうであった³⁾」と述べ、「英霊の声」の持つ重要な意味を強調し、「三島のナシヨナリズムの危険性」を指摘している。

先行論の中で注目したい点は、「英霊の声」の末尾にある「その死顔が、川崎君の顔ではない、何者とも知れぬと云はうか、何者かのあいまいな顔に変容してゐるのを見て、慄然としたのである⁴⁾という一節における川崎の「あいまいな死顔」についての解釈である。川崎の「あいまいな死顔」の意味を如何に捉えるかによりテキストの読みが違ってくるであろう。このことをめぐっては次のような議論がある。

池田純滢は『憂国』の〈不可解〉な顔と、『英霊の声』の〈あいまい〉な顔は、作者三島の自我の放出であり、美とは無縁な表現という以外に捉えようはあるまい⁵⁾、といい、「あいまいな死顔」を、作家三島の自我が投影さ

れた顔として捉えている。

そして、中野美代子は「それは、二・二六事件と敗戦に際して天皇に裏切られた若者たちの顔をなべて等しなみに融かしあつたいわば複合された顔であることは言うまでもない」といい、竹内清己は「川崎君の死顔が、まず作中に記述される「国体なき日本」——「天皇の軍隊の滅亡と軍人精神の死」「日本の滅亡と日本の精神の死」が結果した「虚しい幸福」「ものうき灰色」「うつろなる灰」といった戦後日本の有様を刻印し形象化したに相違ない」としている。中野美代子も竹内清己も、「死顔」の意味を戦時と戦後との断絶から見出し、「あいまいな死顔」を、複数の意味が融合したイメージとして読み取った点で共通していると考えられる。

一方、千種キムラ・ステイブンは「天皇の代理としての憑霊者の青年の死こそ、〈現人神〉としての天皇の再生を約束する仮構の死に他ならないのである」と述べ、川崎の死を、〈現人神〉としての再生を約束する代理者の死、つまり供儀として捉えている。

右に挙げたように、川崎の「あいまいな死顔」について様々な解釈が可能だが、より客観的な情報を以て論じたのが、佐藤秀明の論である。佐藤秀明は、「あいまいな顔」は「明らかに人間天皇の顔である」と明言している。その根拠として、三島が古林尚との対談で話した「ぼくは、むしろ天皇個人にたいして反感を持つてゐるんです」という発言や、三島が「腹を切る前に」「本当は宮中で天皇を殺したい」と言ったことを聞いたという磯田光一の証言を挙げている。また、瀬戸内晴美が三島に「あいまいな顔」を天皇の顔かと手紙で訊いてみたところ、ラストに鍵が隠されており、それは見破られたようだという返事をもらったという話も記している。

佐藤秀明の出した論拠から考えてみると、「英霊の声」の「あいまいな顔」とは、人間天皇の顔であり、より具体的には昭和天皇の顔にほかならないと考えられる。そうだとすると、「英霊の声」は、明らかに昭和天皇を直接的に批判する作品であるといえる。それでは、何故三島は「英霊の声」において、昭和天皇をここまで非難したのか。

本論では、「英霊の声」が発表された時代状況と三島の美意識を照らし合わせ、「英霊の声」における〈現人神〉について考察してみたいと思う。同時代的観点からの研究として、加藤典洋の「一九五九年の結婚」(『日本風景論』、講談社、一九九〇)が注目に値する。加藤典洋は、「一九六〇年前後の「天皇」に関する血腥い出来事が、

右翼・天皇信奉者の側の危機感の高まりの産物」であると指摘し、「それを彼らにもたらしめているのは、一九六〇年の「運動」であると同時に一九五九年の「結婚」である」と述べている。続けて、加藤典洋は「その深度からいえば、前者である以上に後者なのだ」といい、安保闘争という「運動」よりむしろ皇太子の「結婚」の方が、右翼に大きな危機感をもたらしたと論じている。加藤の論は、三島の「憂国」と「英霊の声」が、一九五九年に盛大に行われた皇太子の結婚と何らかの関係があることに着目している点において、本論の考えと相通じている。しかし、加藤の論は「憂国」「英霊の声」前後の状況は、見事に捉えているものの、「英霊の声」が、一九五九年の皇太子の結婚と、どういう点において関係があるのかについては説明が足りない。これは、「英霊の声」の中においての〈現人神〉である天皇イメージと現実世界の天皇イメージを比較することにより明らかにするだろう。さらに、一九五九年の皇太子結婚の意味について考察すると、皇太子結婚が当時の天皇のイメージ形成にいかんにか作用したのかということと、その形成されたイメージが「英霊の声」の美意識と甚だ喰い違っていることが明確になると考えられる。

第二節 「英霊の声」における天皇像

「英霊の声」の主題は「などでてすめろぎは人間となりたまひし」という呪詛の疊句に集約される。それは、〈現人神〉であるべき天皇が「人間」になったことに對する怨嗟であり、そのまま昭和天皇に對する批判になる。しかし、三島の天皇に對する批判は、戦後活発に議論された「天皇の戦争責任問題」とは、全く異なる方向にある。三島の批判は、天皇制否定や天皇の戦争責任追及にあるのではなく、ひたすら「人間天皇」に向けられているのである。

「英霊の声」で描かれている理想的な天皇のイメージは、言うまでもなく、神格化された〈現人神〉である。「英霊の声」で、二・二六事件の青年将校の霊は「そのときだ。丘の麓からただ一騎、白馬の人がしづしづと進んでくるのは。それは人ではない。神である。勇武にして仁慈にましますわれらの頭首、大元帥陛下である」と語る。戦前の神である天皇は、白馬に代表される視覚イメージで表象されている。――

山崎正夫は、天皇を「現人神」として神格化した天皇制について、「イエス信仰にならう天皇信仰と、プロシア・ドイツにならう憲法を持つ立憲君主制という、政治・宗教両面にわたる最高權威を一人に合せ兼ねる特徴」¹⁾を持つていと語っている。「現人神」は、「人間」と「神」といった相反する概念を統合し、また、「東洋」と「西洋」を融合した思想であるが、こういった相反する概念の融合が三島を魅了したと考えられる。山崎正夫が「天皇制も『武士道』も、その中身が、実は西欧からの借り物であるところに、三島が深い親近性を覚える真の理由がある」²⁾と述べるのも、以上の理由による。

それでは、三島は「英霊の声」において、「現人神」としての天皇と「人間」としての天皇をどのように表したのか。まず、神である天皇は、全ての認識の統合者でなければならないのである。

われらの声は届くだらうか。勅諭をとほして玉音はひしひしと、日夜われらの五体に響いてゐるが、われらの血の叫び、死のきはに放つべき万歳の叫びは、そのおん耳に届くだらうか。神なれば千のおん耳を持ちたまひ、千のおん眼を以て、見そなはし、又、きこしめされるにちがひはない。(四八〇頁)

右の引用は、二・二六事件の青年将校たちの霊が語った言葉であるが、霊は天皇が神であれば、「千のおん耳」、「千のおん眼」を以て、将校たちの全ての声を聞き、全ての行動を見なければならぬと語っている。そして、次のように語る。

『陛下に対する片恋といふものはないのだ』とわれらは夢の確信を得たのである。『そのやうなものがあつたとしたら、もし報いらぬ恋がある筈だとしたら、軍人勅諭はいつはりとなり、軍人精神は死に絶えるほかはない。そのやうなものがありえないといふところに、君臣一体のわが国体は成立し、すめるぎは神にましますのだ。』

恋して、恋して、恋狂ひに恋し奉ればよいのだ。どのやうな一方的な恋も、その至純、その熱度にいつはりがなければ、必ず陛下は御嘉納あらせられる。陛下はかくもおん憐み深く、かくも寛仁、かくも

たをやかにましますからだ。それこそはすめるぎの神にまします所以だ』(四八一頁)

天皇は全ての認識の頂点に立つから、将校たちの恋は、天皇が「御嘉納あらせられる」べきである。このことから、片恋というものは存在しないのである。「英霊の声」において、理想的な天皇は、絶対化された神としての天皇である。将校たちは、ただ「恋狂ひに恋し奉ればよい」のである。

「英霊の声」で、二・二六事件の青年将校たちの霊は、神であるべき天皇の姿を次のように二つの「絵図」として描いている。第一の「絵図」では、天皇は青年将校に対して「よし。ご苦労である。その方たちには心配をかけた。今よりのちは、朕親ら政務をとり、国の安泰を計るであらう」といい、つづいて「今までは朕が不明であつた。皇軍は誠忠の士を必要としてゐる。これからはその方たちが積弊をあらため、天皇の軍隊の威烈を蘇らさねばならぬ」と語る。これが、すなわち「人ではない、神である」天皇の姿である。

第二の「絵図」では、天皇は「心安く死ね。その方たちはただちに死なねばならぬ」と語り、この言葉を聞いた青年将校たちは「躊躇なく」「喜びと至福の死」を遂げる。天皇陛下の命令による殉死は、「恋狂ひに恋」の究極的な結末なのである。

二・二六事件の霊に続いて現れた神風特別攻撃隊の霊たちも、天皇の「人間宣言」に対して怒りを表し、次のように語る。

われら自身が神秘であり、われら自身が生ける神であるならば、陛下こそ神であらねばならぬ。神の階梯の高いところに、神としての陛下が輝いてゐて下さらなくてはならぬ。そこにわれらの不滅の根源があり、われらの死の栄光の根源があり、われらと歴史とをつなぐ唯一の糸があるからだ。(五〇一頁)

第二次世界大戦が終局に向かっていった時、神風特攻隊は、(現人神)である天皇の命令に従って、自分の命を懸け、敵の航空母艦に突進した。「英霊の声」において、特攻隊の霊は、「天皇陛下と一体になる」ことを願って出撃したのである。ゆえに、自分たちが「生ける神であるならば、陛下こそ神であらねばならぬ」と語ったので

ある。しかし、二・二六事件将校たちの二つの「絵図」と、特攻隊の夢はただの幻にすぎなかった。実際は天皇は非常に政治的な判断を下したのである。二・二六事件当時、天皇は反乱将校に激怒し、鎮圧を命令したが、これは政治的には非常に適切な措置であった。軍部に操られる恐れがあった天皇はこの事件を契機に統帥権者としての権威を確立することができたのである。この天皇の、神としての判断ではなく人間（政治家）としての判断は、三島にとっては受け入れることが難しかっただろう。

二・二六事件は昭和史上最大の政治事件であるのみではない。昭和史上最大の「精神と政治の衝突」事件であつたのである。そして精神が敗れ、政治理念が勝つた。幕末以来つづいてきた「政治における精神的なもの」の底流は、ここに最もラディカルな昂揚を示し、そして根絶やしにされたのである。

右の引用で、「精神が敗れ、政治理念が勝つた」というのは、少なくとも三島は、二・二六事件直後の天皇の判断は、神であるべき天皇の行動ではなく、政治家としての行動であつたと認識していたことを意味する。

歴史的事件の解釈は多様な見解があるだろうが、三島がこのように考えた根拠は、次のようである。

二・二六事件が勃発した時は、天皇の統帥権が危機に直面していた時期であつた。原田熊雄は、柳条湖事件から始まる一九三一年の満州事変を「陸軍のクーデターの序幕」とみなしているが、これは国家意思決定過程という点からみると、まさに正しい指摘であるといえる。¹⁾ 満州事変の開始に際し、若槻礼次郎内閣が打ちだしたのは不拡大方針であり、天皇もまた不拡大方針を支持したにもかかわらず、事件が起つてしまったからである。すなわち、満州事変は関東軍の意思決定と行動が主導し、陸軍中央部が追認し、政府が追隨するという経過で進んだのである。安田浩は、この時期の天皇の権限について次のように述べている。

天皇はこの時期も自らを、限定されながらも親政的権力行使に乗り出そうとしたのである。（中略）軍事行動が成功に終わるとそれを追認していったのであるから、こうした権益拡大の追求は当然のものとしており、軍事行動への懸念というのも対外関係悪化への配慮からであつたと考えられる。ところがこの時期、天

皇の親政的権力行使はまったくいつてよいほどにその発動を抑えられた。！

満州事変の後も、天皇と軍部とは相互不信に陥り、急進的な軍人の間では昭和天皇の弟である秩父宮を天皇として擁立しようとする計画まであった。このように、天皇の権威が低下しつづつあった時期に、一種のクーデターである二・二六事件が勃発した。この時、天皇は激怒し、「反乱」の鎮圧を命じ続けたのである。こういう天皇の断固たる姿は、事件鎮圧に大きな影響を与えた。このことによって天皇は、国家の最終意思決定者としての個人的権威をも確立するのである。

二・二六事件に続いて、敗戦後も天皇は「人間宣言」をしよう一つの政治的判断をしてしまう。天皇の「人間宣言」はアメリカのマッカーサー司令官との政治的協約であるともいえる。この政治的判断も見事に成功し、天皇は戦争責任から自由になり、その地位を延長させることができたのである。

以上のように、二・二六事件の処理と敗戦後の「人間宣言」とは、天皇が最大の危機に瀕したとき、その危機を乗り越えるために行った政治的行為でもあった。このような非常に「人間的」な天皇の姿に三島由紀夫は当然怒りを覚えたわけである。

「実は朕は人間であつた」という天皇の「人間宣言」に対し、神風特攻隊の霊は次のように語る。

陛下の御誠実は疑ひがない。陛下御自身が、実は人間であつたと仰せ出される以上、その言葉にいつはりのあらう筈はない。高御座にのぼりましてこのかた、陛下はずつと人間であらせられた。あの暗い世に、一つかみの老臣どものほかには友とてなく、たつたお孤りで、あらゆる辛苦をお忍びになりつつ、陛下は人間であらせられた。清らかに、小さく光る人間であらせられた。(五〇九―五一〇頁)

この一節から、特攻隊員は天皇が神ではなく、人間であることを明確に認識しているのがわかる。しかも、霊たちが歌う歌の中では「ただ陛下御一人、神として御身を保たせ玉ひ、／そを架空、そをいつはりとはゆめ宣はず、／(たとひみ心の裏深く、さなりと思すとも)」という句も見つかる。天皇自らが自分を「神でなく、人間で

ある」と思っても、〈現人神〉として存在してもらわなければならないと主張しているのである。この歌を見ると、特攻隊員にとって天皇が実際、神であるかどうかは全く問題にならないようにみえる。ただ、自分たちの美しい死だけが必要であつたのであるが、これは正に美学的な考え方によるものである。

第三節 「英霊の声」における時間・空間概念と美意識

三島は「英霊の声」の発表後、一九六八年七月に「文化防衛論」を『中央公論』に発表して、自らの天皇論を固めていった。「反革命宣言」、「文化防衛論」、「道義的革命」の倫理」などの論文を収め、単行本として発行した『文化防衛論』の「あとがき」には「本書に収めたのは、昭和四十二年から四十四年にわたる私の政治論文、対談、ティーチ・インの速記などである。小説「英霊の声」を書いたのちに、かうした種類の文章を書くことは私にとつて予定されてゐた」とあり、三島は「英霊の声」以後の「文化防衛論」などの論文が、「英霊の声」における「天皇」の論理を補う役割を果たしていることをあきらかにした。

三島は同じ文の中で、「これらの文章によつて私の行動と責任が規制されることも明らかであるが、私のこれらの文章が、行動と並行しつつ、行動の理論化として書かれたことも疑ひがない。このやうな相関関係は、本来、文学の世界にはなく、政治の世界にのみあるものであり、本書は政治的言語で書かれてゐる」と述べ、「反革命宣言」、「文化防衛論」などの論文が、文学の言語ではなく「政治的言語」で書かれ、論理によつて「理論化」したと主張しているが、実際は矛盾を孕んだものとなっている。「文化防衛論」を、「政治的言語」で「政治的論理」をもつて批判した、橋川文三の「美の論理と政治の倫理」に対して、三島は次のように反応している。

私がつともギャフンと参つたのは、第五章の二ページに互る部分でした。貴兄はみごとに私のゴマカシと論理的欠陥を衝かれ、それを手づかみで読者の前にさし出されました。

「三島よ。第一に、お前の反共あるひは恐共の根拠が、文化概念としての天皇の保持する『文化の全体性』の防衛にあるなら、その倫理はをかしいではないか。文化の全体性はすでに明治憲法体制の下で侵されてゐる」

たではないか。いや、共產体制といはず、およそ近代国家の論理と、美の総攬者としての天皇は、根本的に相容れないものを含んでゐるではないか。第二に、天皇と軍隊の直結を求めることは、単に共產革命防止のための政策論としてなら有効だが、直結の瞬間に、文化概念としての天皇は、政治概念としての天皇にすりかはり、これが忽ち文化の全体性の反指定になることは、すでに実験済みではないか」

なるほど、かういふ論法の前には、私の弱点は明らかであります。しかし刑事は、犯人がごまかしを言ったり、論理の撞着を犯したりするとき、正にそのとき、犯人が本音を吐いてゐることを、職業的によく知つてゐます。同時に又、その瞬間に、訊問者も亦、何ほどかの本音を供与せねばならぬことも。

結論を先に言つてしまへば、貴兄のこの二点の設問に、私はたしかにギヤフンと参つたけれども、私自身が参つたといふ「責任」を感じなかつたことも事実なのです。¹⁸

橋川文三の三島に対する「文化防衛論」への批判は、一点は明治憲法体制の下にあつても、文化の全体性が犯されていたという歴史的事実にあり、また、もう一点は天皇と軍隊が直結した場合、それは文化概念としての天皇ではなく、政治概念としての天皇になるといふ論理的な矛盾にあつた。

三島はこういつた橋川の反論を全面的に認めている。しかし、三島は、「犯人」が「ごまかし」を言うとき、「論理の撞着」を犯すときこそ、「本音」を吐いているのであると主張している。三島は自分の論理は矛盾しているが、真実を言っていると力説していると思受けられる。これは、パラドックスであり、あくまで文学的な表現である。すなわち、三島は、自分の天皇論を「政治的言語」や「論理」で語るのではなく、「文学的言語」、「美学」として説いているのである。

三島由紀夫が天皇制の問題を政治の概念ではなく、美学的概念として考えたということは、次の文の中に見出される。

昭和の歴史は敗戦によつて完全に前期後期にわけられたが、そこを連続して生きてきた私には、自分の連続性の根拠と、論理の一貫性の根拠を、どうしても探り出さなければならぬ欲求が生まれてきてゐた。こ

れは文士たると否とを問はず、生の自然な欲求と思はれる。そのとき、どうしても引つかかるのは、「象徴」として天皇を規定した新憲法よりも、天皇御自身の、この「人間宣言」であり、この疑問はおのづから、二・二六事件まで、一すぢの影を投げ、影を辿つて「英霊の声」を書かずにはゐられない地点へ、私自身を追ひ込んだ。自ら「美学」と称するのも滑稽だが、私は私のエスティックを掘り下げるにつれ、その底に天皇制の岩盤がわだかまつてゐることを知らねばならなかつた。¹⁹

ここで、三島は「新憲法」よりも天皇の「人間宣言」のほうがもつと引つかかると述べているが、これは三島の天皇論を理解するのに役立つ重要な一節である。周知のとおり、一九四六年に公布された日本国憲法は、国民主権、平和主義、人権尊重などをその特徴とする、いわゆる民主主義理念に基づいた憲法である。これが天皇の「人間宣言」ほど気にならないものであり、「英霊の声」においても言及されていなかったということは、言い換えれば、天皇の「人間宣言」さえなければ、英霊たちが怨嗟を持たなくていいだろうということになるのではなからうか。すなわち、三島が理想とする天皇制と、いわゆる新憲法下の民主主義が並存できる可能性があるのである。このことをより明確にするため、三島の「文化防衛論」をみると、三島は現行憲法の象徴天皇制において、天皇概念と国家とを分離しようとする和辻哲郎の天皇論を紹介した上で、「民主主義と天皇との間の矛盾を除去しようとする理論構成上、氏が「文化共同体」としての国民の概念を力説してゐることは注目される」²⁰と評価している。三島も和辻の「民主主義と天皇との間の矛盾を除去」することに共感していたのだろう。続いて、三島は自分の「文化概念としての天皇」について次のようにまとめている。

菊と刀の榮譽が最終的に帰一する根源が天皇なのであるから、軍事上の榮譽も亦、文化概念としての天皇から与えられなければならない。現行憲法下法理的に可能な方法だと思はれるが、天皇に榮譽大権の実質を回復し、軍の儀仗を受けられることはもちろん、連隊旗も直接下賜されなければならない。²¹

この引用文では、「文化概念としての天皇制」が「現行憲法下法的に可能」であると語ったところに注目した

い。周知の通り日本国憲法の第一章の第一条「天皇の地位・国民主権」では「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」と規定していて、天皇は象徴にすぎず、国民が主権を持つことを明確にしている。このような条件下で、三島由紀夫が「文化概念としての天皇」を夢見たのは、天皇の政治的権威がある程度あきらめていたとも言えよう。また、三島は「橋川文三氏への公開状」においても、同じ内容を繰り返して述べている。

私は必ずしも榮譽大権の復活によつて「政治的天皇」が復活するとは信じません。問題は実に簡単なことで、現在の天皇も保持してをられる文官への榮譽授与権を武官へも横取りさせるだけのことであり、又、自衛隊法の細則に規定されてゐるとほり、天皇は儀仗を受けられるのが当然でありながら、一部宮内官僚の配慮によつて、それすら忌避されてゐるのを正道に戻すだけのことでありませんか。²²

ここでは、三島にとつて、天皇の復権は関心事ではないことが垣間見られる。三島の願ひは、「榮譽授与権を武官へも横取りさせる」こと、「自衛隊法の細則に規定されてゐるとほり、天皇は儀仗を受けられるのが当然」であるから、そうすること、というただ二点である。三島の天皇論は、憲法解釈問題及びその影響については全然触れていない。三島にとつて、天皇制は、政治的な問題より、美的であるか否かの問題が重要であつたと考えられる。

以上のことから、三島が天皇を本当の神として信じていたわけでもなく、政治的な復権を願つたわけでもないということがわかる。三島の天皇観は神学的、あるいは政治的側面より美学的側面から捉える必要がある。それならば、「英霊の声」の中で、三島の天皇観と繋がる美意識とは何であろうか。

「英霊の声」で二・二六事件の青年将校の霊に映つた天皇は「神は遠く、小さく、美しく、清らかに光つてゐた」のである。そして、霊たちは天皇に対する感情を次のように語る。

あの美しい清らかな遠い星と、われらとの間には、しかし何といふ距離があることだらう。われらの汚れ

た戎衣と、あの天上のかぐはしい聖衣との間には、何といふ遠い距離があることだらう。(中略) われらは夢みた。距離はいつも夢みさせる。(四七九—四八〇頁)

この科白は、青年将校が天皇に対する「美」を語る時、「距離」に関する観念が欠かせない要素であることを示している。青年将校にとって「遠い距離」とは、美しく、いつも夢見させるのである。「兄霊」の後、川崎君に懸かってくる神風特攻隊の「弟霊」も「われらもそれらの日々、兄神と同じく、時折、遠い、小さい、清らかな神のことを考えた」と語る。〈現人神〉である天皇は、遠く、小さく、そして美しいのである。

このように、三島は、「英霊の声」において、〈現人神〉の「美」を「遠い」、「距離」などの空間的観念を利用して表現している。しかし、「英霊の声」における「美」は、適切な距離を保ったまま固定しているわけではない。

いかなる僻地、北溟南海の果てに死すとも、われらは必ず陛下の御馬前で死ぬのである。しかしもし『そのとき』が来て、絶望的な距離が一举につづめられ、あの遠い星がすぐ目の前に現はれたとき、そのかがやきに目は盲ひ、ひれ伏し、言葉は口籠もり、何一つなす術は知らぬながらも、その至福はいかばかりであらう。(中略) われらは生涯に來るとしてもないその刹那をひたすらに夢みた。(四八〇頁)

右の引用は兄神である二・二六事件青年将校の霊の科白である。ここで、青年将校と天皇との間の「遠い距離」が、「一挙につづめられ」とあるが、それは「死」を意味する。青年将校の霊が夢見たのは、美しい「遠い距離」が、瞬時に破られ、「死」により、美の絶頂に至ることであった。

われらもそれらの日々、兄神と同じく、時折、遠い、小さい、清らかな神のことを考えた。(中略) もしかすると、今かうして一刻一刻それに近づき、最後には愛機の加速度を以て突入してゆく死、目ざす敵艦の心臓部にありありとわれらを迎へて両手をひろげて待つであらう死、その瞬間に、われらはあの、遠い、小さい、清らかな神のおもかげを、死の顔の上に見るかもしれなかった。そのとき距離は一挙にゼロとなり、わ

れらとあの神と死とは一体になるであらう。そのやうに、冷静に計算されて、最後の雄々しい勇気をこれに加へて、われらはやすやすと、天皇陛下と一体になるであらう。(五〇〇—五〇一頁)

この引用は、弟神である特攻隊員の霊が、「死」の瞬間を描写している一節である。ここでも、「神」は「遠い、小さい、清らか」なものであり、美しい「距離」を保っている。その「距離」が「一挙にゼロとな」つて、「天皇陛下と一体になる」のである。ここで重要なのは、兄神の語りにも、弟神の語りにも、空間的修辭法とともに時間的修辭法も使われているのが確認できることだ。「距離」を「つづめ」るのは「瞬間」、「刹那」として表現されていて、これは、「美」の絶頂、すなわち「死」を意味するからだ。

このような時間・空間認識は、「剣道」を連想させる。三島は三四歳で「剣道」を始め、以後、没頭したが、意識的にせよ、無意識にせよ、「剣道」から距離の美学を発見したに違いないと私は思う。三島は「現代青年論」において、「剣道用語に「間合ひ」といふ大切な言葉がある」と言つた上で、次のように語る。

青年は年長者に対して、反抗するか、狎れすぎるか、どちらかに傾き、適切な間合ひがとれないのである。だから初心者に対する剣道の稽古と同様、年長者のはうからキチンと間合ひをとつてやる必要がある。²³

剣道では「相手との距離」を「間合ひ」というが、相手との距離をどうとるかで、勝負はすでに決しているといつていいほど、剣道において重要な要素である。²⁴三島は、右の引用文では「青年」と「年長者」との社会的関係を「間合ひ」という空間的觀念として表現しているのである。つまり、三島は、剣道においてだけではなく、人間関係においても適切な「距離」の重要さを指摘しているのである。²⁵このように、「間合ひ」は、空間概念だけを指しているのではなく、人と人との心理的關係も表す言葉であるが、さらに重要な意味合いを含んでいる。野間恒は、「間合ひ」の意味を次のように語っている。

剣道における間合ひとは、何を意味するかと申しますと、広義に解釈した間合ひは、これを空間的に申せ

ば、敵と我との距離、間隔であり、時間的に申せば、時計の振り子が左右に振動するその中間のごとく、敵の心の動きに生じる瞬間的の間隙を申すのでありまして、さらにこれを広めて、虚実までも間合いのことばの中に包含する場合があります。瞬間的の間隙とか、虚実とかは、心の間合いとでも申すのでありましょう。心の間合いとは、彼我の距離は同じであつても、心境の活作用によって、彼には不利に、我には有利の状態となるのをいうのでありまして、間合いの真の妙諦は、ここに多く含まれ、『敵よりは遠く、我よりは近く』という古人の訓えは、是を指したものでありましょう。

このように、「間合い」は、空間的距離だけを意味するだけではなく、「瞬間的の間隙」という時間の概念も持つ。さらには、「虚実」という意味にまで広めることが可能である。剣道において「間合い」とは、一定の距離を保つが、相手を攻撃する時は、その距離が一挙につづめられるということである。こういった「間合い」の意味合いは、「英霊の声」での「距離」と類似性が認められる。たとえば、次のような三島の美意識とも相通じている。

自分が知られない存在として、全く未知の女性と、刺傷の一瞬に於てだけ結ばれるといふ、この戦慄的なほど高度なエロティシズムの表象は、大都会のみが与えることのできる諸条件の上に成立つてゐる。²⁷

これは「通り魔」について述べた件であるが、女性を刺す瞬間を「高度なエロティシズム」として表現している。ここからもわかるように、三島由紀夫にとつての「美」は、空間的要素と時間的要素とが合一するところで完成するといえよう。右の引用の「高度なエロティシズム」とは、兄神と弟神の語った「距離」が「一挙につづめられ」ることと似通っている。

第四節 戦後大衆天皇制への不満

「英霊の声」において、「兄霊」と「弟霊」は、「ただ金よ金よと思ひめぐらせば／人の値打は金よりも卑しく

なりゆき」と唄い、戦後日本を覆う拝金主義や無意味な平和主義を批判している。それは、日本は戦後復興を成し遂げ、豊かになったが、精神を失くし、廃墟ともいうべき状況になってしまったというものだ。また、靈は「日本の敗れたるはよし／農地の改革せられたるはよし／社会主義的改革も行はるるがよし／わが祖国は破れたれば／敗れたる負目を悉く肩に荷ふはよし」と唄う。日本が敗れても、さらに社会主義的改革までも、全て我慢できると唄っているが、一つだけに対して怒りを抑えきれないのである。「されど、ただ一つ、ただ一つ／（中略）陛下は人間なりと仰せらるべからざりし」と唄うのである。これは、全てが許容できるが、天皇の人間宣言だけは許せないということであり、言い換えれば、このような戦後日本の問題は全て天皇の人間宣言から起因するという主張であろう。

一九四六年元旦、天皇の「人間宣言」以後、天皇制の大衆化は着々と進み、だんだん国民に親近感を持たせる存在となってきた。「人間宣言」の直後に行われた地方巡幸の様子は次のように書かれている。

一九四六年二月十九日、昭和天皇は戦後初めての地方巡幸を開始した。（中略）背広姿で民衆の前に現れ、笑みをたたえながら手を振る天皇はどこへ行っても大歓迎であった。戦前の日本国民は、軍服を着、腰にはサーベルを下げて、白馬にまたがる天皇の姿しか見たことがなかった。この天皇の変身ぶりととまどう者もあったが、地方巡幸は天皇と日本国民との距離を一気に縮めたと言つてよい。²⁸

戦前の天皇は威厳のある神格化された天皇であった。「大演習の黄塵のかなた、天皇旗のひらめく下に、白馬に跨られた大元帥陛下の御姿は、遠く小さく、われらがそのために死すべき現人神のおん形として、われらが心に焼きつけられた」という白馬のイメージで表象される（現人神）は、「遠くて小さい」イメージであるが、地方巡幸は天皇と日本国民の距離を縮める役割をし、天皇には、（現人神）としての姿がなくなり、（人間天皇）のイメージしか残らなくなった。以後も天皇はマスコミに扱われる普通の人間になっていく。

三島は、左翼の人が天皇に対して悪いイメージを持っているのは、「目に見える天皇像があまりにも週刊誌に毒され、マス・コミュニケーションに毒されてゐる、その毒された媒体を通じてしかこれを評価し得ない」²⁹から

であると指摘している。つまり、週刊誌やテレビなどに露出される大衆的天皇としてのイメージに反感を持っていたのである。大衆天皇のイメージを構築する画期となったのが、一九五九年四月十日の皇太子結婚であった。史上初の平民出身の皇太子妃である美智子は空前の「ミッチーブーム」を巻き起こし、連日マスコミに報道された。『平凡』や『明星』のような大衆雑誌も、美空ひばりや石原裕次郎、高倉健などの当代のスターと並んで皇太子妃の写真を載せるなど、完全にスター扱いするようになった。³。実際、結婚当日の皇太子結婚の中継をみるため、テレビ購入が相次ぎ、前年一〇〇万台だったのが、この年、四月に二〇〇万台を突破するまでに至ったのである。³。ここで、戦後天皇制は「平民」「恋愛」「家庭」の三つのシンボルによって、新中間層を軸とする大衆社会状況と結合することになる。しかし、当然のことであろうが、三島由紀夫はこの結婚に反対を表明したという。³。加藤典洋は一九五九年の皇太子結婚を「文字通り「人間」の位置にまで降下した天皇と「市民」の位置にまで上昇した旧臣民（国民、庶民）の合体、にほかならなかつた」と³と評価している。すなわち、三島において、皇太子と民間人ミッチーとの結婚は、「臣民」と間に、〈現人神〉として「適切な間合い」が取れない事態を招くものであり、天皇家が自ら〈現人神〉の地位を投げ捨てる事件にほかならない。

この婚約を演出したのは、元慶応義塾大学総長で、皇太子明仁の教育にあたった小泉信三と宮内庁長官の宇佐美毅であった。彼らは、伝統墨守の皇室を「開かれた皇室」に変えることによって、天皇制をもっと広い大衆の基礎のうえに置き直す必要があると考えたのである。³

皇太子明仁の結婚を主導し、天皇家の大衆的人気に大きな功績を立てた小泉信三に対して、三島は露骨な反感を表している。

小泉信三が悪い。とつても悪いよ。あれは悪いやつで大逆臣ですよ。というのは、いま天皇制に危機があるとすれば、それは天皇個人にたいする民衆の人氣ですよ。（中略）天皇というものは、だから個人的な人格というのは二次的な問題で、すべてもとの天照大神にたちかえってゆくべきなんです。今上天皇はいつても今上天皇です。つまり、天皇の御子様が次の天皇になるとかどうとかいう問題じゃなくて、大嘗会と同時にすべて天照大神と直結しちゃうんです。そういう非人間的性格というものを天皇から失わせた、小泉信三

がそれをやったということが、戦後の天皇制のつくり方において最大の誤謬だったと思うんです。そんなことをしたから、天皇制がだめになったとぼくは思っているんです。それはあなたのおっしゃる政治的に利用された絶対君主制≡天皇制というものと、ぜんぜん意味が違うんです。小泉信三はぼくの、つまりインパーソナルな天皇というイメージをめちやくちやにしちゃったんです。³⁵

右の引用で、三島の小泉信三に対する恨みが深かったことがよく伝わる。「非人間的性格」及び「インパーソナルな天皇」という言葉から、三島の望む天皇のあり方は明確である。「絶対君主制≡天皇制」という「政治的」な問題には興味なく、三島の関心事は、ひたすら「天皇」の「イメージ」に集中しているのである。

また、三島は早稲田大学大隈講堂でのティーチ・インでは次のように語った。

小泉信三は結局天皇制を民主化しようとして、やり過ぎて週刊誌的天皇制にしちゃったわけです。そして結局国民と天皇との関係を論理的につくらなかったと思うのです。というのはディグニティをなくすることによって国民とつなぐという考えが間違っているということを小泉さんは死ぬまで気がつかなかった。³⁶

三島は、ここで「ディグニティをなくすることによって国民とつなぐ」こと自体が間違いだであると断言している。つまり、三島には神としての天皇と臣民との間に適切な距離をとるのが不可能になった大衆天皇制に対する強い嫌悪感があつたのである。三島にとって、国民に親密に近寄っていく戦後天皇の姿とは、距離を保つことができず、その「距離」を一挙にゼロにして、「美」の絶頂を見出すこともできない、絶望にほかならないのである。ここで、「距離」を一挙にゼロにするということは、神風特攻隊が夢見たように（現人神）のため死に、（現人神）と同一化することを意味するが、戦後になって、天皇が（人間）になった以上、そのような夢はなくなつたのである。それだけではなく、現実の天皇が現存し、人間イメージを強めている限り、そういう夢を見ることすらできなくなつたのである。

第五節 むすび

「葉隠」の中で、三島は「恋の至極は忍恋と見立て候。逢ひてからは恋のたけが低し、一生忍んで思ひ死する事こそ本意なれ」³という文を取りあげているが、恋の至極ともいえる天皇への恋は、近寄らない「忍恋」であろう。「英霊の声」においても、天皇に対する恋は、次のように語られる。

われらの心は恋に燃え、仰ぎ見ることはおそれ憚りながら、忠良の兵士の若いかがやく目は、ひとしくそのおん方の至高のお姿をえがいていた。われらの大元帥にしてわれらの慈母。勇武にして仁慈のおん方。(四七九頁)

このように、「仰ぎ見ること」がおそれ憚るほど、天皇は遠い存在であるべきである。これが三島にとつての「現人神」であり、美しい天皇である。しかし、戦後の天皇は、三島の理想的な天皇像とは正反対であった。「人間宣言」があつて、一九五九年の「人間」との結婚があつて、「国民」に親しまれる天皇があるだけであつた。

「英霊の声」が発表された一九六〇年代は、安保闘争以後、左翼の台頭が目立った時期でもある。が、「英霊の声」の霊は、「社会主義的改革も行はるるがよし」、「されど、ただ一つ、ただ一つ／(中略)陛下は人間なりと仰せらるべからざりし」と語る。三島にとつて、社会主義革命及び天皇の政治的位置などより、ただ天皇のイメージだけが重要な問題である。こういった意味で、天皇の「人間宣言」と一九五九年の「結婚」は、三島には絶望に等しい出来事であらう。

もし、天皇が不在なら、二・二六事件の青年将校のように、架空の世界で、いくらでも新しいイメージを創ることができ。しかし、天皇が生き延びて、現実世界で、親近感のある大衆的な天皇のイメージを固めつつある状況では、いくら天才的な作家であつても、手に負えないのである。こういった意味で、「英霊の声」は非常に不敬なデキストになりうるともいえよう。

* 本論における三島由紀夫「英霊の声」の引用は『決定版三島由紀夫全集20』（新潮社）に拠った。尚、適宜旧漢字は新漢字に改めた。

注

- 1 江藤淳「文芸時評」『朝日新聞』一九六六年五月三十日
- 2 林房雄、三島由紀夫『対話・日本人論』、番町書房、一九六六、三八頁
- 3 池田純益『憂国』『英霊の声』に於ける思想性（長谷川泉、森安理文、遠藤裕、小川和佑共編『三島由紀夫研究』、右文書院、一九七〇、三三九頁
- 4 同上、三四九頁
- 5 中野美代子『憂国』及び『英霊の声』論——鬼神相貌変『国文学解釈と教材の研究』、学燈社、一九七六年十二月、一〇〇頁
- 6 竹内清己『英霊の声』——反転するテキスト或いは折口学の聲み『国文学解釈と鑑賞』、至文社、二〇〇〇年十一月、二二〇—二二一頁
- 7 千種キムラ・ステイブン『三島由紀夫とテロルの倫理』、作品社、二〇〇四、五五頁
- 8 佐藤秀明『英霊の声』——合唱の聞き書き『国文学解釈と教材の研究』、学燈社、一九九三年五月、一〇七頁
- 9 同上、一〇七—一〇八頁
- 10 加藤典洋「一九五九年の結婚」『日本風景論』、講談社、一九九〇、五五頁
- 11 白馬は、〈現人神〉である天皇のイメージ形成に用いられた。日中戦争における武漢三鎮占領や、太平洋戦争におけるシンガポール陥落の際には、天皇が白馬に乗り、二重橋に現れた。昭和初期における天皇の神格化は、白馬に代表される視覚イメージの変化によるところが大きい。（原武史・吉田裕編『天皇・皇室辞典』、岩波書店、二〇〇五、二二八頁）
- 12 山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』、海燕書房、一九七八、一四三頁
- 13 同上、二四三頁
- 14 三島由紀夫「二・二六事件について」『週刊読売』、一九六八年二月二十三日
- 15 原田熊雄『西園寺公と政局2』、岩波書店、一九八八、八〇—八二頁参照。
- 16 安田浩『天皇の政治史・睦仁・嘉仁・裕仁の時代』、青木書店、一九九八、一三二—一三三頁

- 17 三島由紀夫「あとがき」『文化防衛論』新潮社、一九六九
- 18 三島由紀夫「橋川文三氏への公開状」『中央公論』、一九六八年十月
- 19 三島由紀夫「二・二六事件と私」『英霊の声』河出書房新社、一九六六
- 20 三島由紀夫「文化防衛論」『中央公論』、一九六八年七月
- 21 同上
- 22 三島由紀夫「橋川文三氏への公開状」『中央公論』、一九六八年十月
- 23 三島由紀夫「現代青年論」『読売新聞』一九六九年一月一日
- 24 小沢丘『剣道入門』、鶴書房、一九六九、五三頁参照
- 25 三島由紀夫は『行動学入門』の「行動と間合い」の章でも、行動において肝心な要素として、「間合い」を取り上げている。
- 26 野間恒『剣道読本』、講談社、一九七六、九七頁
- 27 三島由紀夫「魔——現代の状況の象徴的構図」『新潮』、一九六一年七月
- 28 中村政則『戦後史と象徴天皇』、岩波書店、一九九二、一七五頁
- 29 三島由紀夫「討論を終えて」『討論 三島由紀夫と東大全共闘』、新潮社、一九六九
- 30 天野恵一編『大衆社会と象徴天皇制』、社会評論社、一九九五、一六八—一七五頁参照。
- 31 加納実紀代『天皇制とジェンダー』、インパクト出版会、二〇〇二、六八—六九頁参照。
- 32 安田常雄「象徴天皇制と民衆意識」『歴史学研究』、歴史学研究会、一九九一年七月、三六—三九頁参照。
- 33 加藤典洋「一九五九年の結婚」『日本風景論』、講談社、一九九〇、七八頁
- 34 中村政則『戦後史と象徴天皇』、岩波書店、一九九二、一九二—一九六頁参照。
- 35 三島由紀夫『図書新聞』、一九七〇年十二月十二日（山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』、海燕書房、一九七八、二四八頁から転載）
- 36 三島由紀夫「早稲田大学大隈講堂でのティーチ・イン」、一九六八年十月三日（山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』、海燕書房、一九七八、二四八頁から転載）
- 37 三島由紀夫『葉隠入門』、光文社、一九六七